

# 児童・生徒の自己学習力調査の報告

上 淵 寿<sup>1</sup> 無 藤 隆<sup>2</sup> 藤 江 康 彦<sup>3</sup>

本報告では、2003年度に山梨県の小学校、中学校の児童・生徒総計3743名を対象に実施した、自己学習力調査の概要を説明する。その主な結果として、アカデミックコンピテンス（学力の自己評価）が比較的年少の頃から客観的であること、そして各学習観と各学習力が、アカデミックコンピテンスと関係があることが示された。すなわち、学力の自己評価が高い子どもの方が、一般的に自己学習力が高いことが示された。また、学習観の中でも、学習の努力量や時間を重視する学習量志向から、学習の仕方を重視する方略志向へと、学年が上がるにつれて、変化する様子も示唆された。今後、さらにこの研究結果を検討する必要があるだろう。

## 調査目的

小学生、中学生の学習に関する意識に関する調査を通して、一般的な学力を支える自己学習力の実態や機能を明らかにし、学校における児童・生徒の学力向上に向けての取り組みに対して、情報を提供することを目的として、本調査を行った。なお、本調査は、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センターと山梨県教育研究所とが共同で実施したものである。

## 調査方法

### ■調査対象

山梨県内の公立小学校24校 4年生1209名、5年生395名、6年生378名。

山梨県内の公立中学校11校 1年生1112名、2年生360名、3年生289名。

### ■調査時期

2003年10月から2003年11月

### ■材料

以下の下位尺度からなる質問紙を作成した。

- ・アカデミック・コンピテンス（全6項目による学力の自己評価）
- ・学習観（方略志向、学習量志向、環境志向。それぞれ

4項目）

- ・学習力（11カテゴリー。各4項目ずつ）
- ・学校生活への満足度（教科を含めた学校生活の各時間が好きな傾向 14項目）

計76項目の自己評定による質問項目と、自由に感じたことや考えたことを書いてよいという教示を付した、自由記述の欄から、質問紙は構成されている。自己評定による質問項目は、いずれもすべて4件法であった。

なお、この質問紙の項目は、2002年度にお茶の水女子大学子ども発達教育研究センターとベネッセコーポレーションが共同で行った、「学習力『学習に対する意識と行動』に関する調査」で使用した質問紙及び、その結果抽出された質問項目に基づいている。

これらの質問項目の設定意図は次のようなものである。子どもたちの学力は、学校等の中で、友だち、先生、保護者との関係の中で構成されていくものである。子どもたちが学習をどのようなこととして理解し、それに取り組む仕方をどのように捉えているのかが、実際の学習に関わってくるものと思われる。

では、どのような意識、取り組みで学習すれば、学力の向上に寄与するのだろうか。それを明らかにすることによって、子どもたちへのよりよく、積極的な教育的働きかけのあり方が、明らかになっていくのではないか。

そのために、子どもたちが持っている学習に対する意識や態度、学習の仕方を、下記のような概念に整理

キーワード：アカデミックコンピテンス、自己学習力、学習観

1 東京学芸大学教育学部、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター客員研究員

2 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター（現所属：白梅学園短期大学）

3 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

し、調査項目として設定した。

### ■調査項目詳細

- (1) アカデミックコンピテンス：学校での学習活動の結果をどのように自分でどのように捉えているかの自己評価。学校が好きか、授業の理解、成績の認識、授業中の教師の質問の理解、テストの点数、記憶の得意さ
- (2) 学習観：学習の何を重んじているかの傾向  
方略志向：勉強方法の工夫を重んじる傾向  
学習量志向：勉強時間や量を重んじる傾向  
環境志向：勉強方法や結果を環境にゆだねる傾向
- (3) 学習力  
夢を持つ力：将来の目標を明確に持つ傾向  
失敗に対する柔軟性：失敗を成功につなげようと努力する傾向  
思考過程の重視：結果よりも考えるプロセスを重視する傾向  
精緻化方略：丸暗記ではなく工夫して覚えようとする傾向  
モニタリング方略：自己評価しながら学習を進める傾向  
けじめをつける力：計画を立てたり自ら学習環境を整えて勉強を始める力  
予習する力：明日の準備を自発的に行う傾向  
復習する力：その日に習ったことを家で振り返る傾向  
ノートを作る力：後で振り返りやすいように工夫してノートをとる傾向  
自己評価する力：達成度合いを自己判断して、直そうとする傾向  
資料を使って調べる力：積極的に調べる活動を行う傾向
- (4) 学校生活への満足度  
教科を含めた学校生活の各時間が好きな傾向
  1. 国語
  2. 社会
  3. 算数（中学校では数学）
  4. 理科
  5. 音楽
  6. 体育

7. 家庭科
8. 図工（中学校では美術）
9. 総合的な学習の時間
10. 給食の時間
11. 休み時間
12. 部活動（またはクラブ活動）
13. 英語（中学生のみ）
14. 技術（中学生のみ）

### ■調査手続

山梨県内の小学校24校、中学校11校に協力を賜り、質問紙による調査をクラス単位で行った。小学校4年生は、教師による質問紙の読み上げに合わせて回答した。小学校5年生以上の学年では、教示を教師が行った後、質問紙を児童または生徒が自分で読んで回答する形式をとった。

## 結 果

### ■データの数量化

各下位尺度及びカテゴリーに相当する質問項目への評定値を合計した。項目数が下位尺度によって異なるため、合計値を項目数で割った数値（つまり、1項目あたりの平均値）を以下の分析で用いた。

### 1. 小学生・中学生の学習に対する意識

#### ■学力の自己認識

まず、学習の状況について把握するために、学力を自己評価してもらった。その反応を合成して得点化し、アカデミックコンピテンス（学力の自己評価）とした。学年ごとのアカデミックコンピテンスの平均値を比較したものは、図1のようになる。

平均値だけを見ると、アカデミックコンピテンスに、学年間で若干差がみられる。低学年になるほど、学力の自己評価は高くなると一般に言われるが、この結果からは、それはうかがうことができず、むしろ逆の結果となり、小学校5年生の得点が一番低くなった。この原因はこれだけでは十分推測できなかった。

とりあえず小学校段階でも、自分の学力評価については、それなりに客観的な状態にあるといえるのではないか。

#### ■学校生活への満足度

学校生活への満足度も、人数の違いはあるが、どの

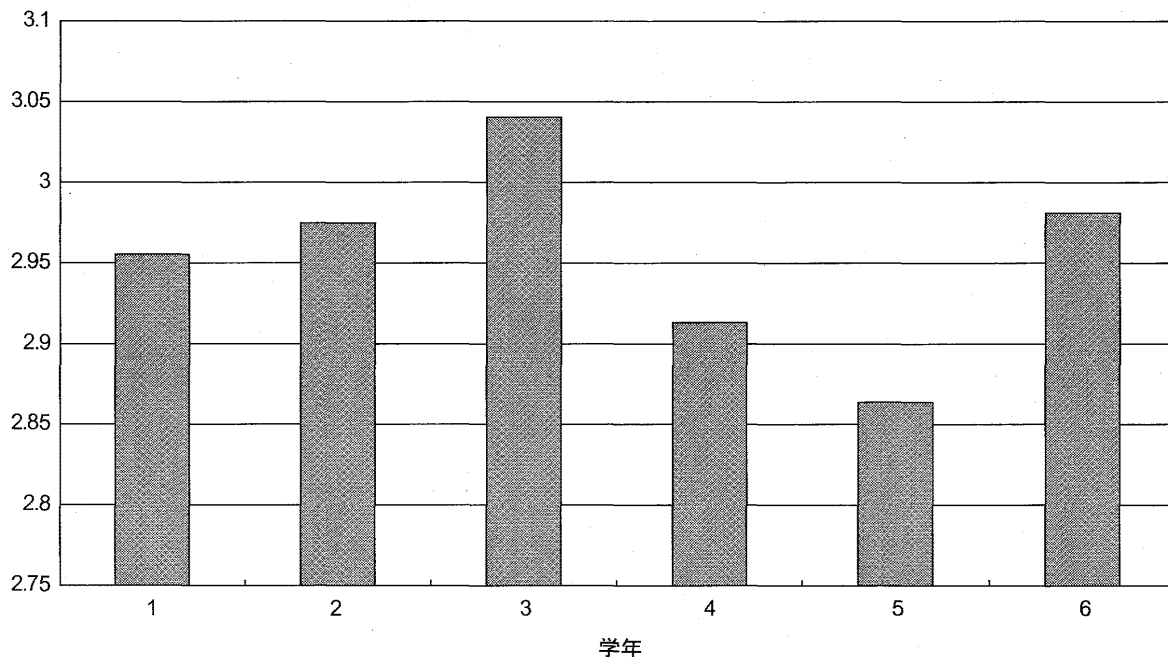


図1 学年別のアカデミックコンピテンスの平均値

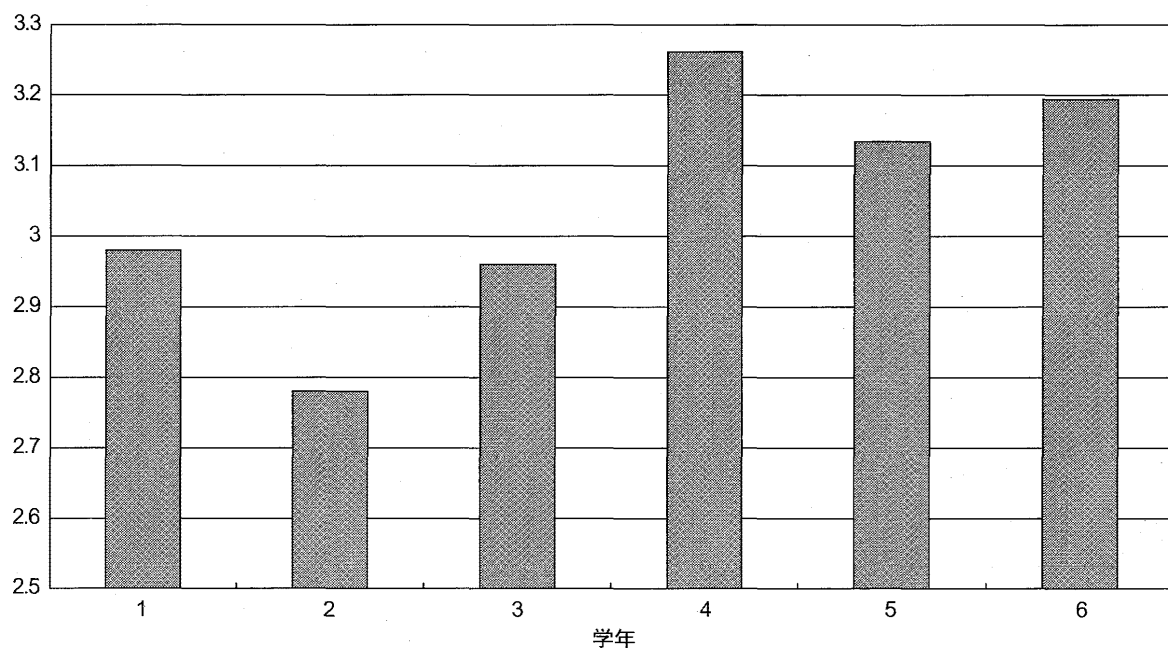


図2 学年別の学校生活への満足度

学年もだいたい同じような傾向にあった。すなわち、満足度はやや高めの子が多かった。

その中でも、中学2年生において、やや満足度の低い子どもが多いことが特徴的である(図2)。中学2年生は、中学校に進学して1年以上経過している学年である。こうした時期で満足度が低いのは、中学校の持つ学校風土への不適合が多い可能性もある。

一方、小学校4年生では、満足度がかなり高い子どもが多いことが特徴的である。小学校4年生は、小学

校に入学して3年以上を経過しており、小学校の学校風土にもよく慣れて、児童期の中でも充実した時期だと考えることができるかもしれない。

## 2. 学習観の傾向と学力との関係

### ■学習観

方略志向は、勉強の方法の工夫を重んじる傾向であり、学習量志向は、勉強時間や量を重んじる傾向であ

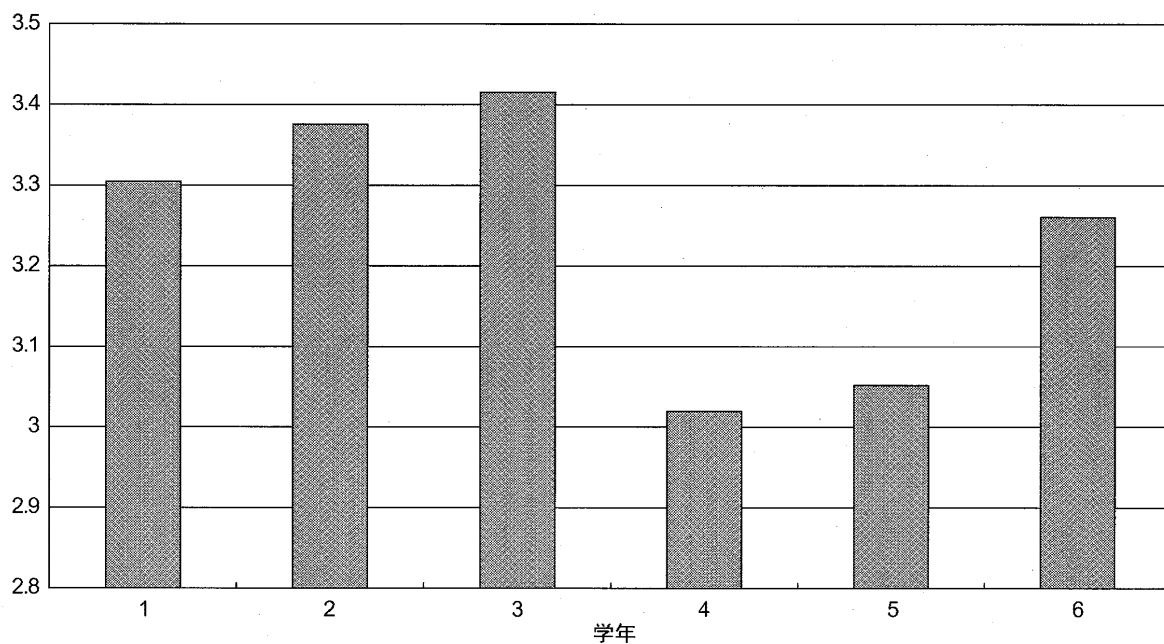


図3 学年別の方略志向の平均値

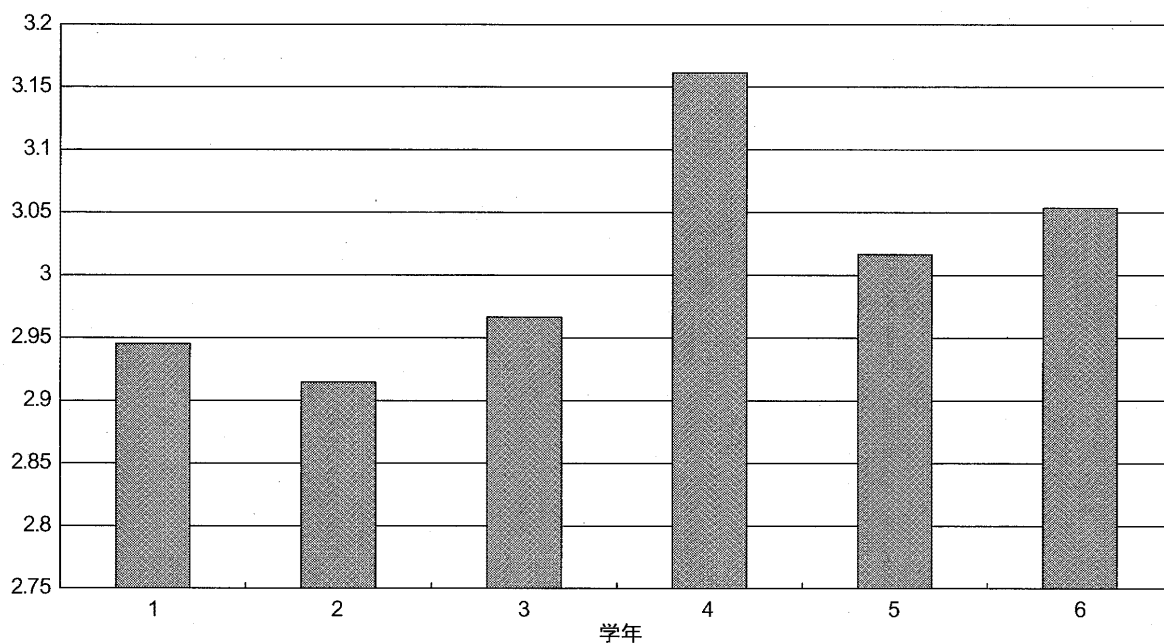


図4 学年別の学習量志向の平均値

る。環境志向は、勉強方法を環境にゆだねる傾向である。小学生や中学生のこれらの傾向が、どのような状態にあるかを調べた。

まず、方略志向については、図3から明らかなように、小学校4年生、5年生の平均値が他の学年と比べて低い。それに対して、中学生では学年間の差はあまりない。したがって、勉強の仕方を自ら工夫するという考え方は、小学校中学年ぐらいではまだ十分育っていない可能性が高い。それは小学校6年生以降に成長

し、中学生で安定的になると思われる。

次に、学習量志向についてであるが、これは方略志向とは異なる結果を得た。わずかではあるが、小学校4年生の平均値が最も高く、逆にその他の学年、殊に中学生の値が低いのが特徴的である。学習量志向は、勉強時間や量を重んじる傾向である。小学校低学年のデータがあるわけではないが、中学年ぐらいまでは、努力量や勉強時間を多くすることが、成績や学業達成に結びつくと子どもたちは考えているのではないだろ

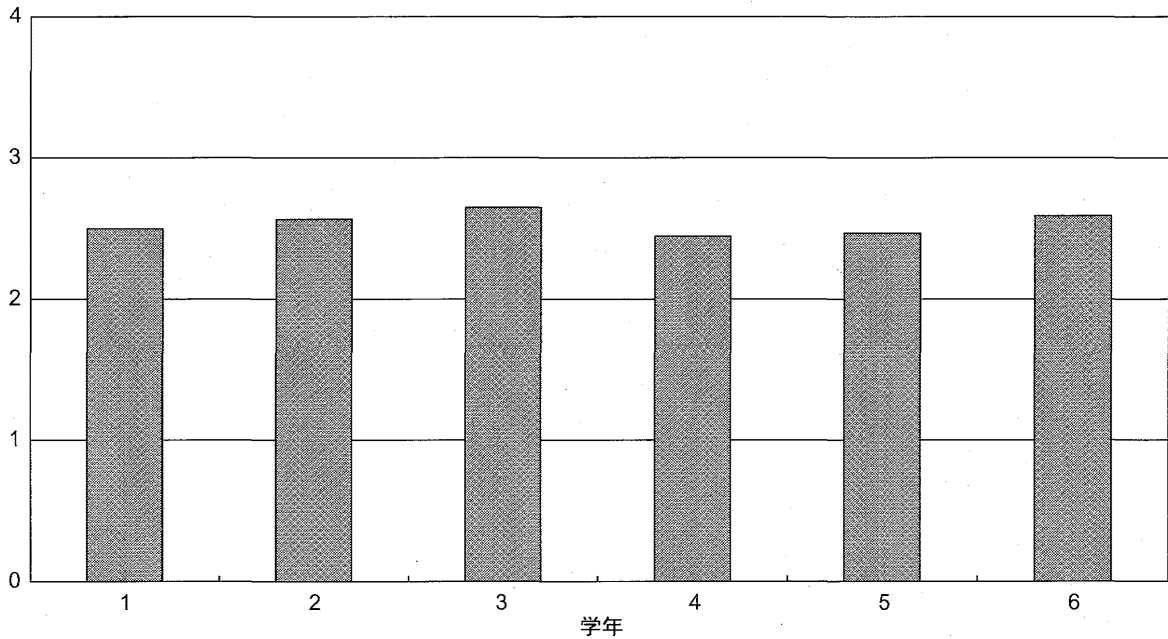


図5 学年別の環境志向の平均値

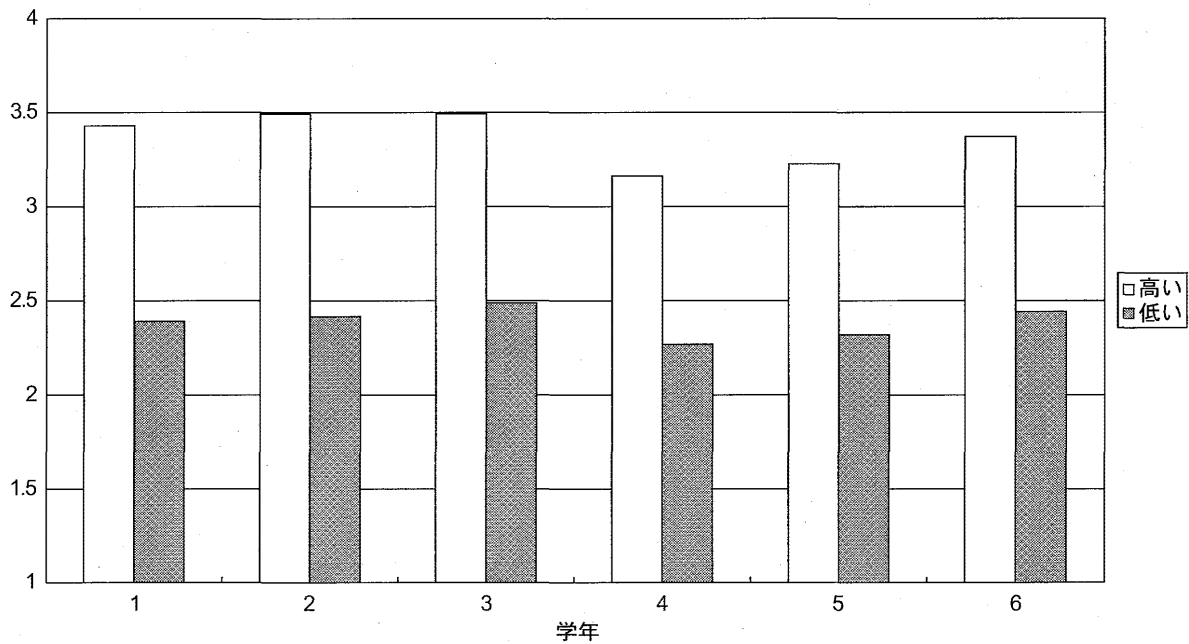


図6 学年別・アカデミックコンピテンス別の方略志向の平均値

うか。

最後に、環境志向では、ほぼ方略志向と同様の結果となった。つまり、わずかではあるが、小学校4年生の平均値が最も低く、逆にその他の学年、殊に中学生の値がやや高いのが特徴的である。環境志向は、勉強方法を環境にゆだねる傾向である。塾通いなどが本格化するの、小学校高学年ぐらいからだと考えられるので、そのような影響を受けているのかもしれない。

全体の傾向としては、方略志向が一般的に高く、学

習量志向が次に高く、環境志向がやや低い同じ程度であるといえるだろう。また、発達という視点からみて、学習量志向から次第に方略志向へと転じる傾向が窺える。つまり、単なる努力量や学習時間の長さだけを学習において重視してきたのが、学年が上がるにつれて、方略を重視する見方が学習の仕方やスキルを工夫することで学習における達成を得ようとするという方向性になるようになるに思われる。これは、抽象的な思考が発達するようになることや、より内省的な

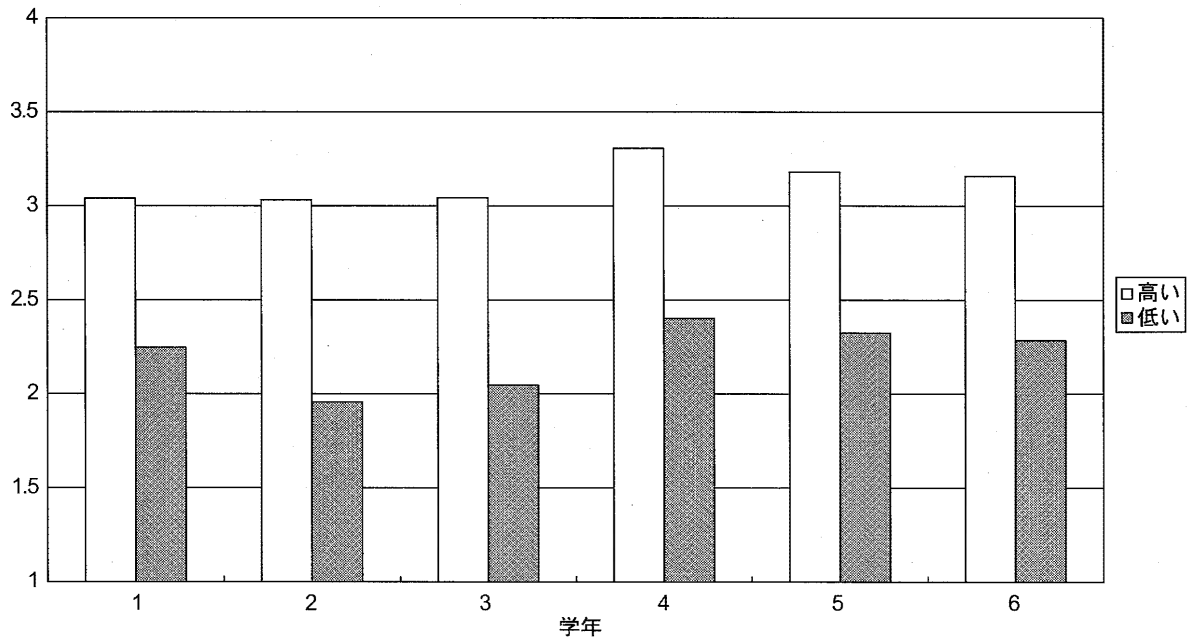


図7 学年別・アカデミックコンピテンス別の学習量志向の平均値

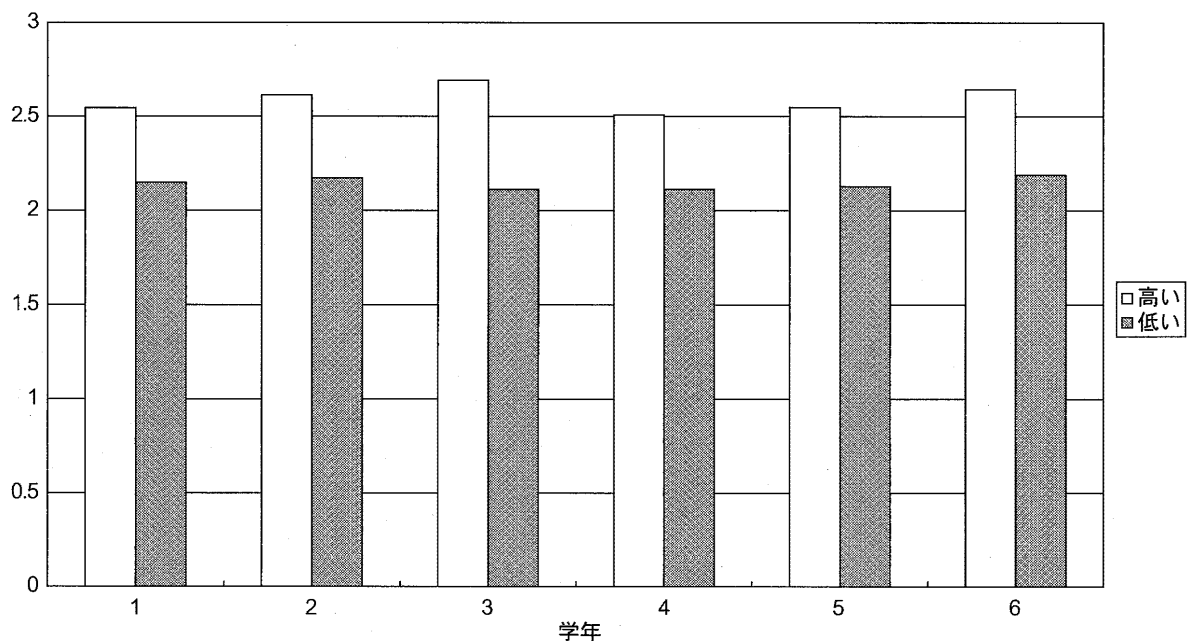


図8 学年別・アカデミックコンピテンス別の環境志向の平均値

思考ができるようになることと無関係ではないだろう。また、学校での学習課題も抽象的な思考を必要とするような課題に変わっていくことと無縁ではない。小学生であっても、6年生ぐらいになれば、勉強方法を工夫することが大事だと認識しているようである。一方で、小学生の段階では、学習量志向も高く、毎日続けて勉強時間を増やせば、テストで高得点がとれると考えているのではないか。

一方、環境志向は、全体の傾向として、高くない。

しかしながら、小学校4年生で最も低かった環境志向の平均値が、中学生になるとやや上昇することは注目に値すると思われる。先述のように、塾通いが本格化するという外的な要因もあるが、内的な要因に目をむけると、学習が自らの力だけではなし得ないという気持ちちが中学生ではやや強まっているのではないか。それは先に述べたように、学年が上がるにつれて、学習内容も抽象化、高度化し、難しくなっていることが関わっているのかもしれない。

次に、学力の自己評価である、アカデミックコンピテンスとの関係についてみた。

図6、図7、図8のいずれをみても同じような傾向を示していると思われる。つまり、どの学年でも、アカデミックコンピテンスの高い傾向の子どもは、方略志向、学習量志向、環境志向が高い傾向にある。

考え方や学業達成の手段に対する方向性の違いはあるが、いずれの志向も、学習を積極的にすすめて、高い達成を望む傾向であることには変わりはない。したがって、小学校4年生ぐらいからでも、学習方法を工夫することや、学習量を充実させて増やすことや、学習環境がよいことへの意識ができてきている子どもほど、学力の自己評価が高いと言えるのではないか。

### 3. 学力と学習力の関係

次に、学習力の各カテゴリーについて、アカデミックコンピテンス（学力の自己評価）との関係を見て、アカデミックコンピテンス（学力の自己評価）の高い子どもと低い子どもの意識や行動の傾向をみてみたい。そのため、便宜的にアカデミックコンピテンスの平均値が高い子どもと低い子どもの2群に児童・生徒を分けて、比較を行った。

#### ■夢を持つ力

学年、アカデミックコンピテンスの高低、夢を持つ力との関係を、図9に示した。学年によって差の程度はあるが、一貫してアカデミックコンピテンスが高い

群が低い群よりも、夢を持つ力が高いことがわかる。

夢を持つ力は、将来の目標を明確に持つ傾向である。将来の具体的な目標を持つことは、それにむかって学習や努力の仕方を工夫していくためには必要なことであり、また意欲も高くなることが考えられる。そのため、このような結果となったのであろう。

学年間で比較すると、やや小学生の方が高く、中学生がそれに比べるとやや低いことが気になる。特に小学校4年生が最も平均値が高く、学年があがるにつれて、平均値がわずかではあるが、低下していくことが読み取れる。中学校では授業も難しくなり、自己の能力について、より客観的にみることができるだけに、それだけ将来に対する希望も持ちにくくなっているのであろうか。その他の自己学習力や意欲の面と大いに関係すると思われるので、注意を要するところであろう。

#### ■失敗に対する柔軟性

図10に示したように、学力の自己評価の高い傾向のある子どもは、失敗に対する柔軟性が高い傾向にある間違いを単なる誤りとせず、学習の一部とみなし、うまくいきそうにない、思ったように行かないときでも努力して困難を打開しようとする態度をとれる傾向が高いと思われる。

学年間で比較すると、失敗に対する柔軟性も、やや小学生の方が高く、中学生がそれに比べるとやや低いことが気になる。特に小学校4年生が最も平均値が高く、学年があがるにつれて、平均値がわずかではある

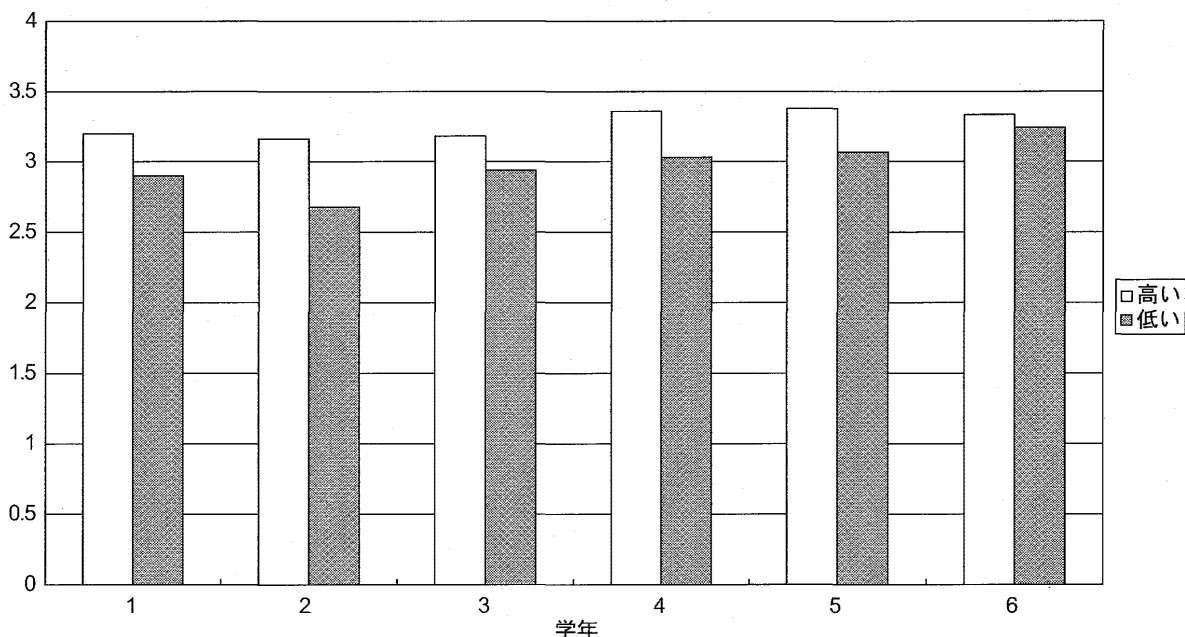


図9 学年別・アカデミックコンピテンス別の夢を持つ力の平均値

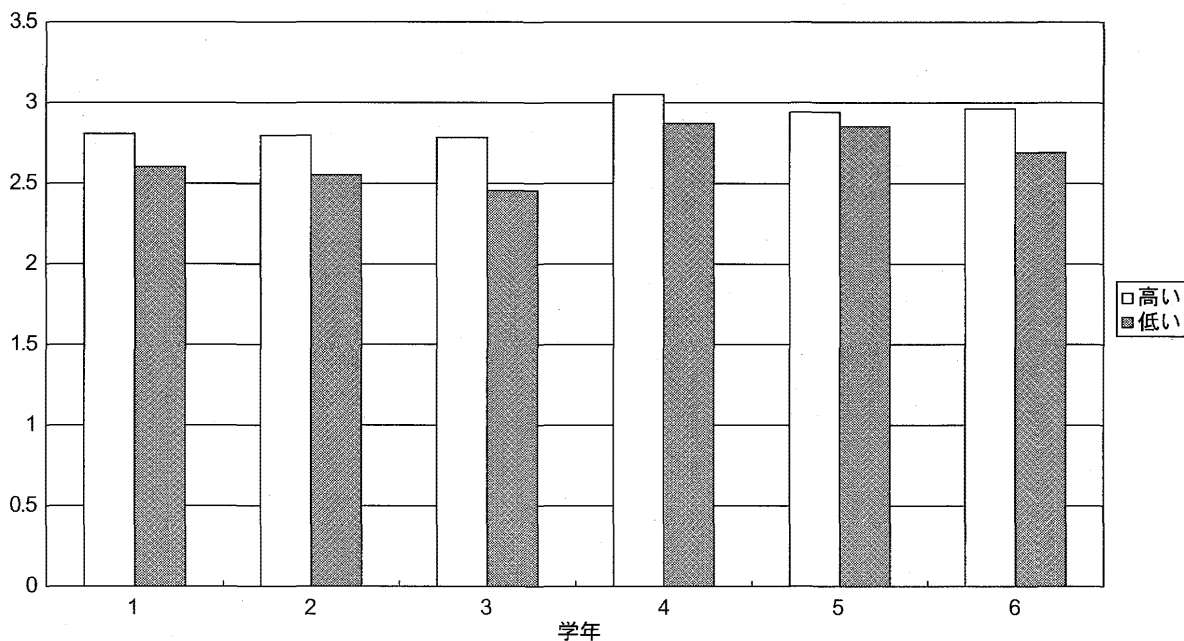


図10 学年別・アカデミックコンピテンス別の失敗に対する柔軟性の平均値

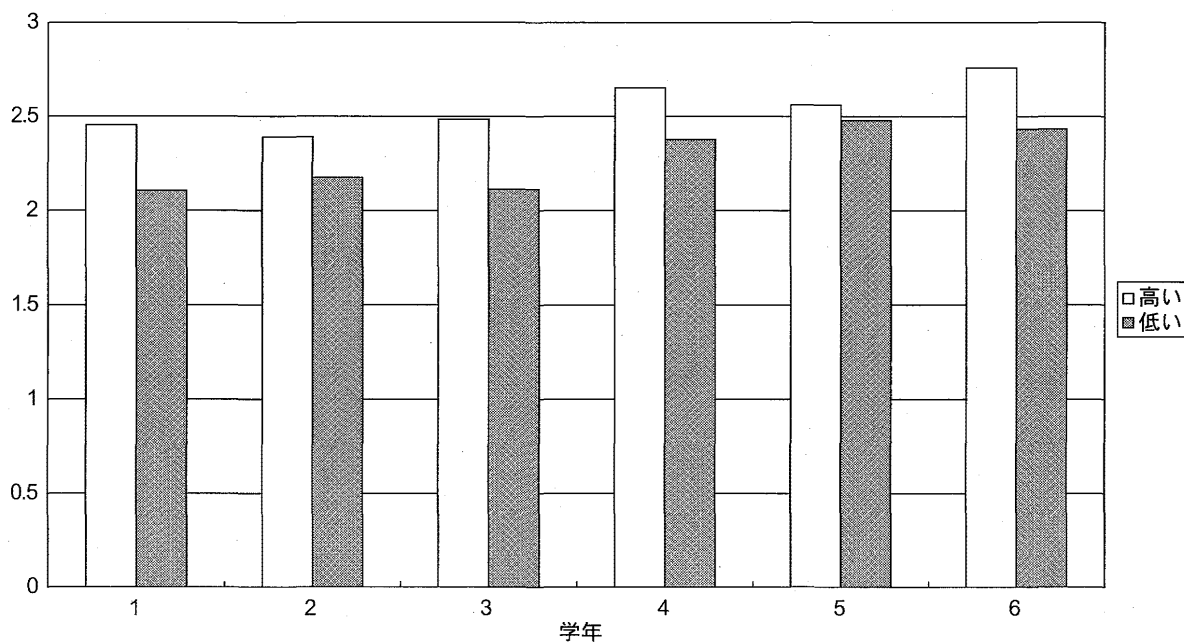


図11 学年別・アカデミックコンピテンス別の思考過程の重視の平均値

が、低下していくことが読み取れる。なお、小学生では、アカデミックコンピテンスの高低によって、失敗に対する柔軟性の差はそれほど大きくなかったが、中学生になると、その差はより大きくなる。中学生では学習課題がより難しくなるため、失敗に対して柔軟に関われる学習のあり方の方が、結果として学力の向上に結びついているのかもしれない。

#### ■思考過程の重視

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、思考過程を重視する傾向がある。

答えが正しいだけでなく答えにたどり着くまでの考え方が重要なことだと思えることや、問題が解けた後でも別の解き方でできないかということを試していく行動を取る傾向にある。

学年間で比較すると、思考過程の重視も、やや小学



生の方が高く、中学生がそれに比べるとやや低いことが気になる。特に小学校4年生が最も平均値が高く、学年があがるにつれて、平均値がわずかではあるが、低下していくことが読み取れる。思考過程の重視は、結果よりも考えるプロセスを重視する傾向である。しかし、学習課題が難しくなり、また進学等のことを考慮するならば、プロセスよりも結果を重視するようになる可能性が高い。

だが、小学校5年生以外の学年では、アカデミックコンピテンスが高い群と低い群で、思考過程の重視の

平均値にかなりの違いがみられる。思考過程の重視が学力と結びついている可能性を示していると思われる。

#### ■精緻化方略

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、丸暗記をするのではなく、学習の仕方を工夫する、物事を関連づけて覚える（精緻化方略をとる）傾向にあると考えられる。

つまり、授業や個人学習の中で答えを得た時、なぜ

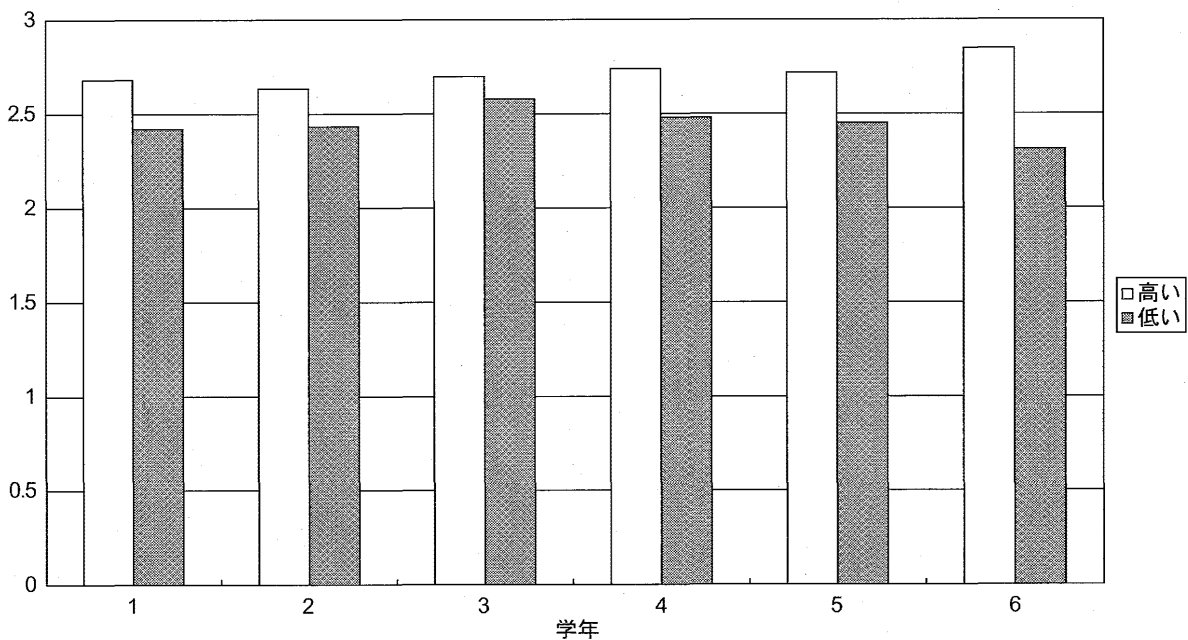


図12 学年別・アカデミックコンピテンス別の精緻化方略の平均値

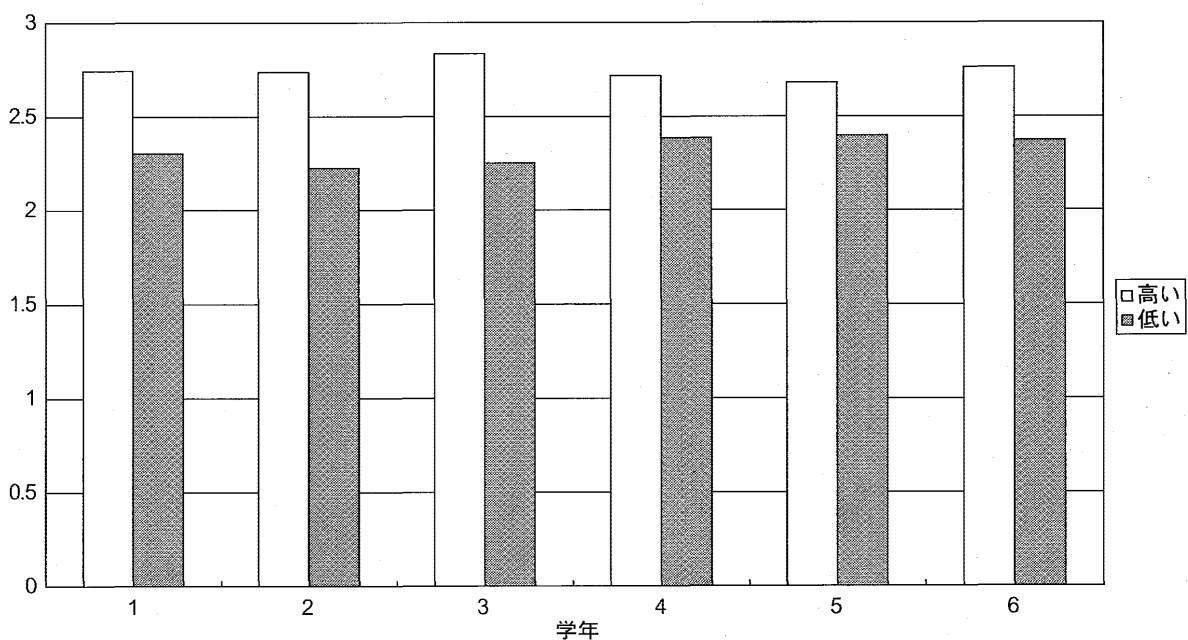


図13 学年別・アカデミックコンピテンス別のモニタリング方略の平均値

そのような答えになるのかという意味を考えて覚えたり、新しい言葉が出てきたときに自分の知っている言葉に置き換えたりすることができる、傾向にあるということがいえるだろう。

■モニタリング方略

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、モニタリング方略をとる傾向にある。

すなわち、アカデミックコンピテンスが高い子どもは、問題が分からなくなったとき、自分がどこで分か

らなくなっているのかを見直してみたり、授業の内容について知っているか、本を読んでいるときに内容がわかっているかを、確認しながら学習ができる傾向にあるということができる。

特にアカデミックコンピテンスの違いによるモニタリング方略の使用の傾向の違いは、中学生で著しい。

■けじめをつける力

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、けじめをつける力が高い傾向にある。

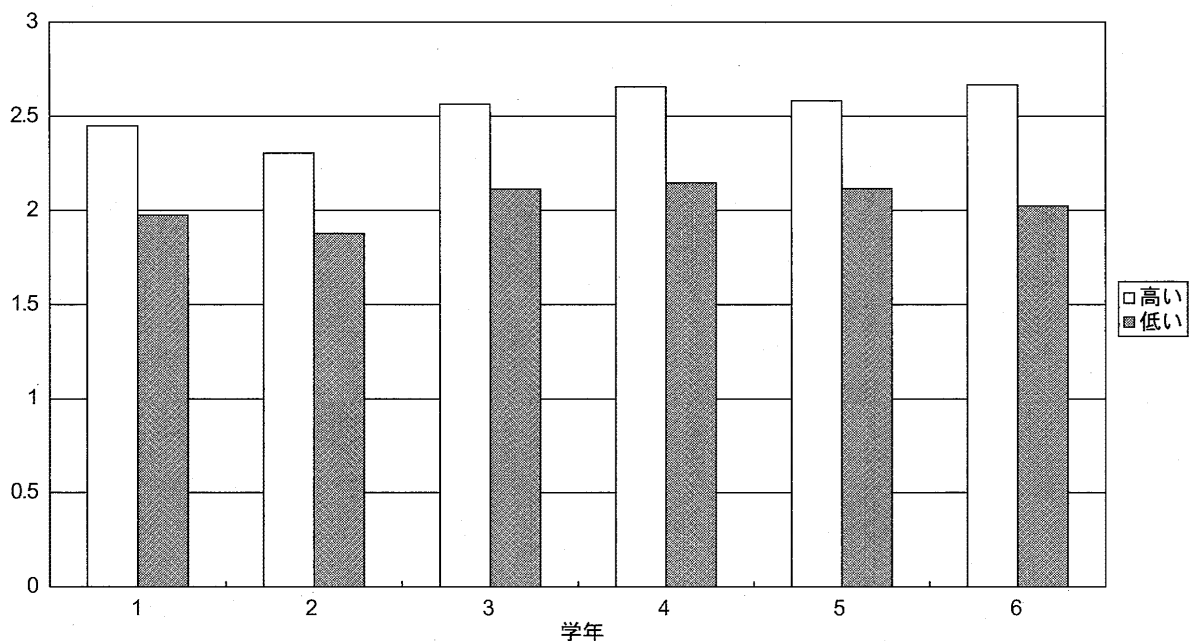


図14 学年別・アカデミックコンピテンス別のけじめをつける力の平均値

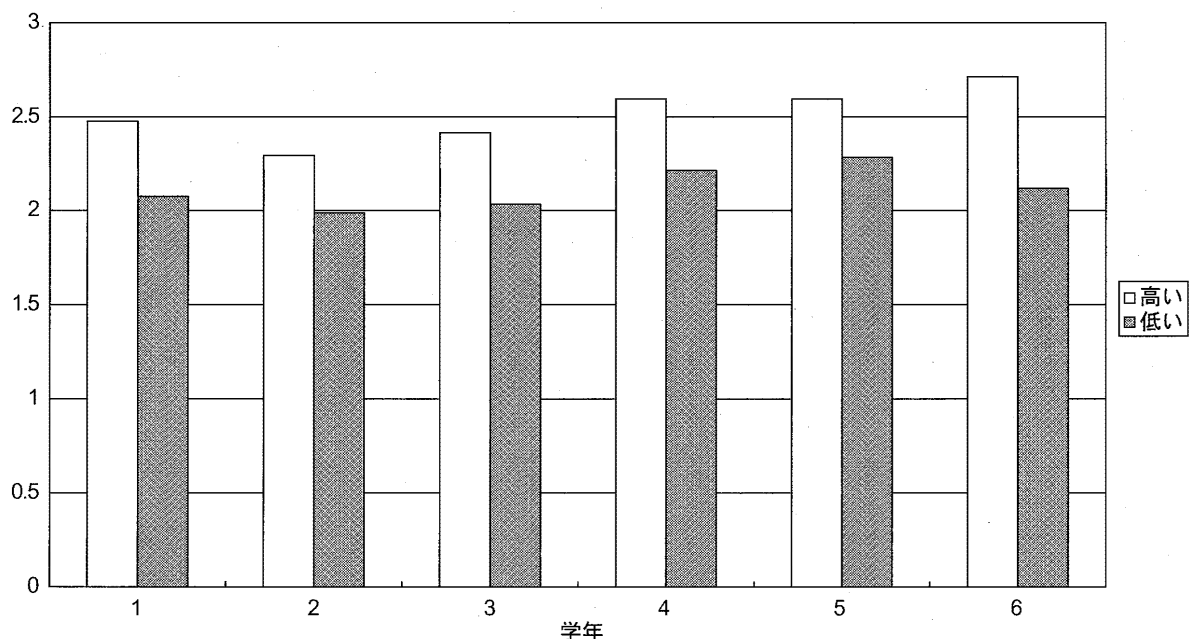


図15 学年別・アカデミックコンピテンス別の予習する力の平均値

家の人に「勉強しなさい」と言われなくても、自分から勉強を始められる、計画的に学習をすることができる、勉強するときは、テレビを消して行っているなどの行動がよくできる傾向にある。

■予習する力

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、予習する力が高い傾向にある。

すなわち、学校の準備を忘れず自分でできて、ほとんどの子どもたちができており、前の日に教科書を見

て何を習うかを見ておき、明日学校で習うことで、分からないことがあったら家で調べておく等の活動ができていると思われる。

■復習する力

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、復習する力が高い傾向にある。すなわち、ノートを見返す、習ったことがわかっているか確認する、宿題をやっていく、学校でならったことを家の人に話すという活動を行っていると考えられる。どの学年でもアカデミッ

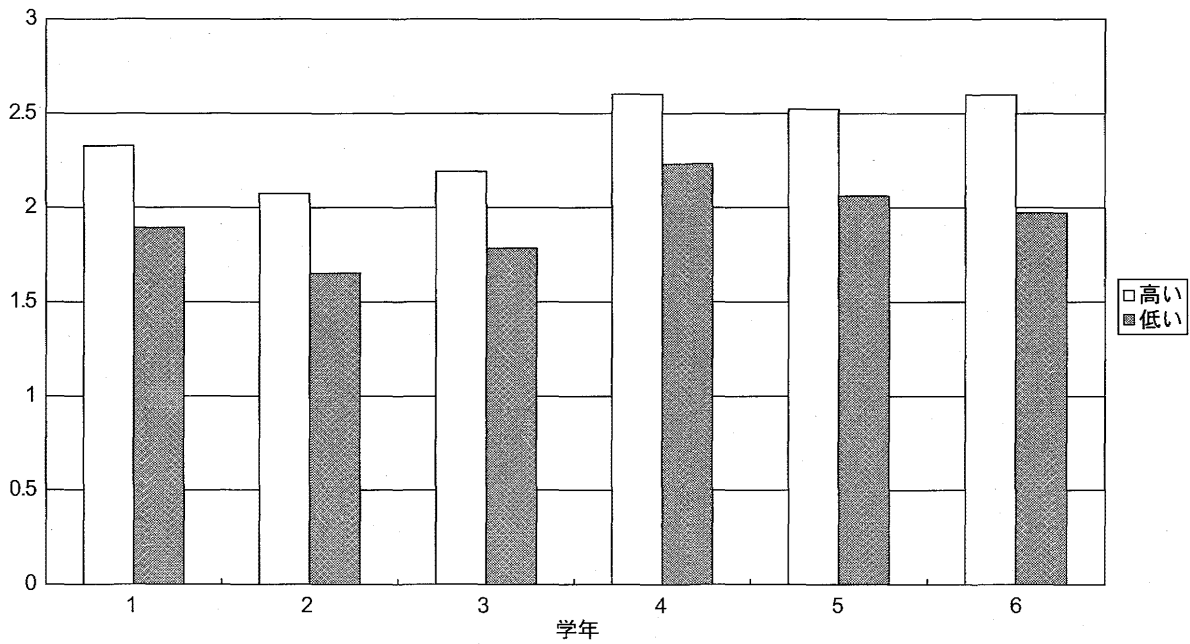


図16 学年別・アカデミックコンピテンス別の復習する力の平均値

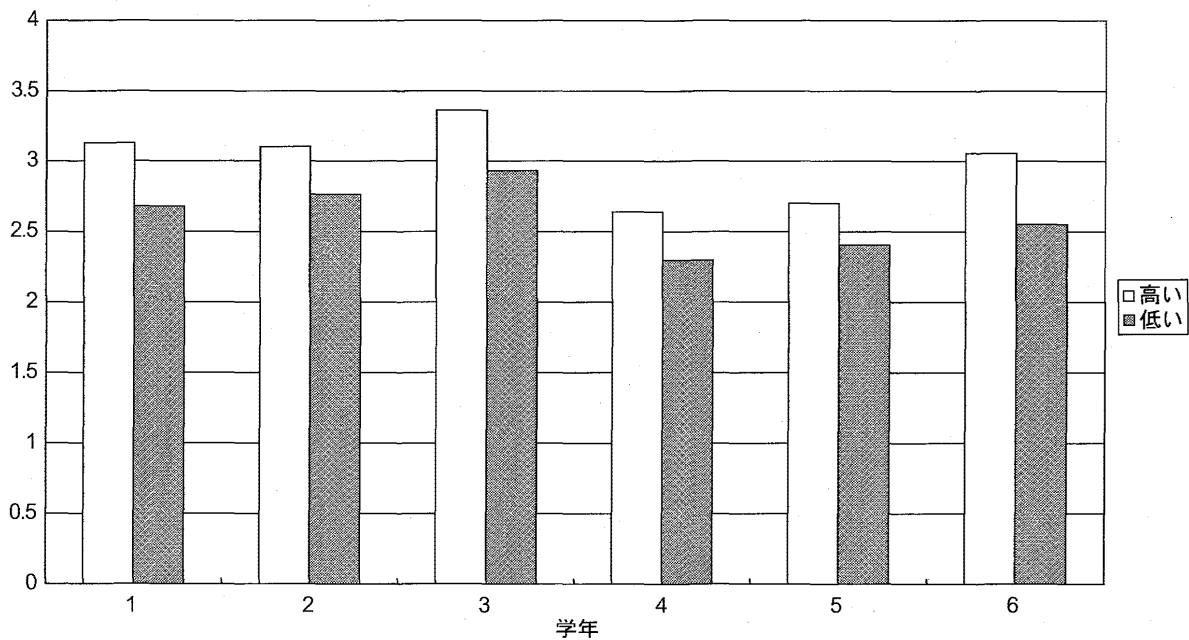


図17 学年別・アカデミックコンピテンス別のノートをとる力の平均値

クコンピテンスによる違いは大きかった (図16)。

■ノートを取る力について

学力の自己評価が高い傾向にある子どもはノートを取る力が高い傾向にある。

しかし、学年間で比較すると、小学生は全体的に得点が低く、中学生では得点が高めに出ている。小学生の段階ではノートを取ることは日常的な作業になっているだろうが、それが学習活動として深く意識されていないのかもしれない。

■自己評価をする力

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、自己評価をする力が高い傾向にある。これはどの学年でもいえることであるが、小学生ではアカデミックコンピテンスによる違いはそれほどなかった。反対に、中学生ではその差は大きく、なぜ間違えたのか理由を考えた、自分がわからないところがどこかを自覚するといった自己評価活動が、具体的な学習と結びついていることをうかがわせる。

興味深いことに、学年別にみると、小学生の方が自

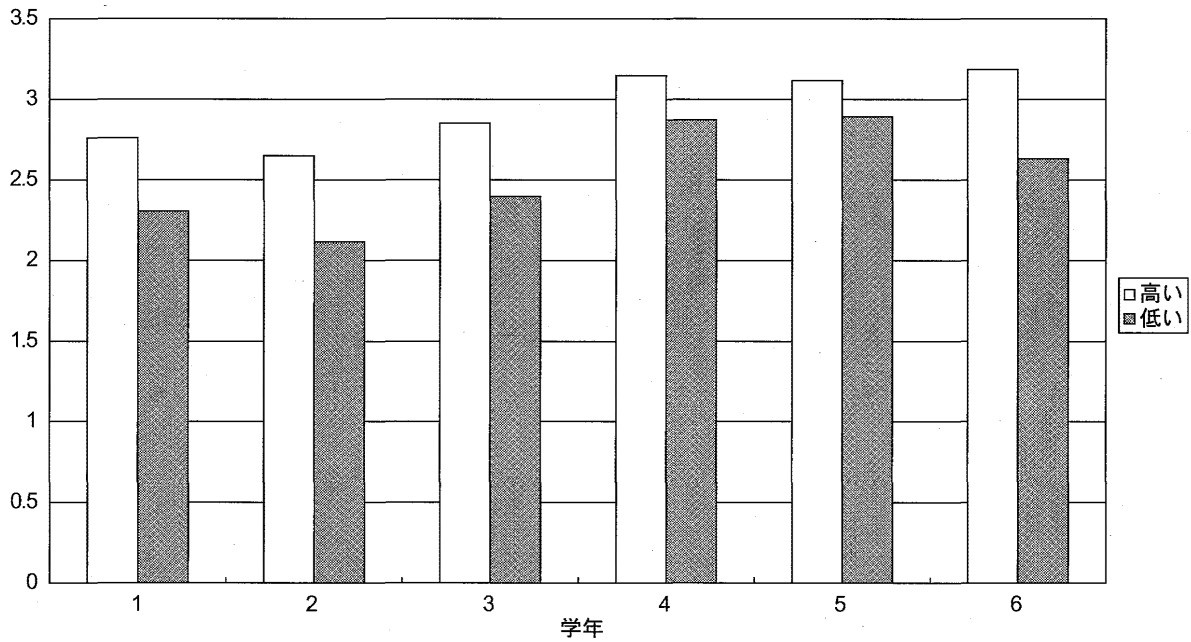


図18 学年別・アカデミックコンピテンス別の自己評価する力の平均値

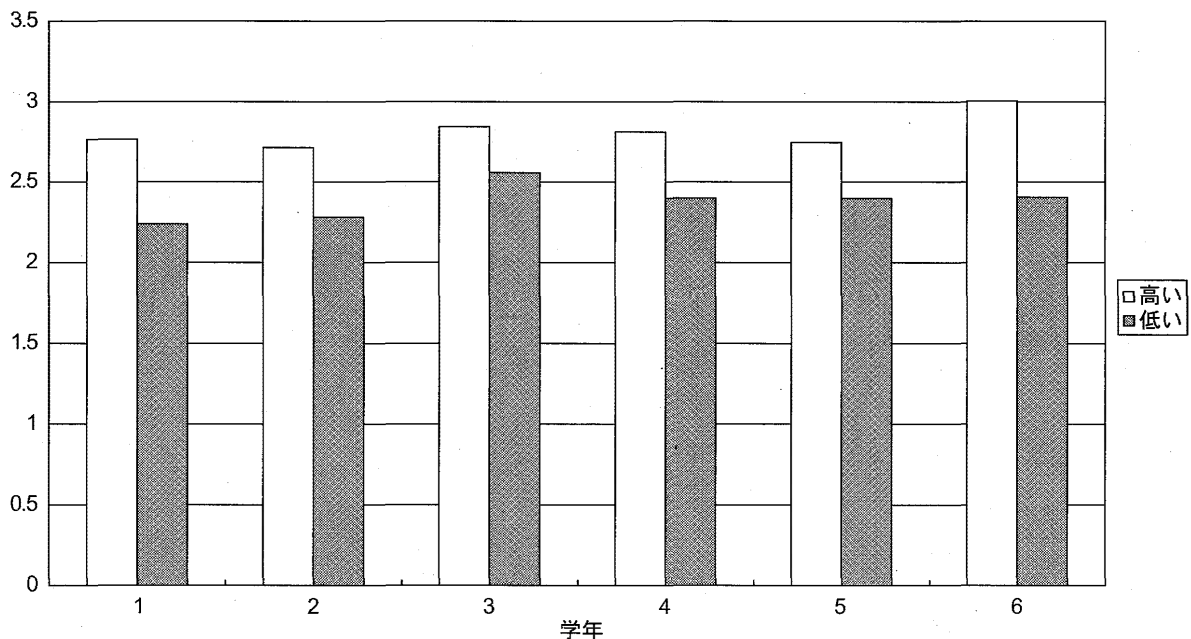


図19 学年別・アカデミックコンピテンス別の資料を使って調べる力の平均値

己評価する力の平均値は高く、中学生になるとやや低下するということである。アカデミックコンピテンスでは、比較的小学生でも客観的な見方ができると思われるが、それは基準が明確であるからであり、基準が曖昧な自己評価活動では、客観的な見方ができないのかもしれない。

#### ■資料を使って調べる力

学力の自己評価が高い傾向にある子どもは、資料を使って調べる力が高い傾向にある。

資料を使って調べる力があるということは、家に図鑑や辞典が、机の上などのすぐ使えるところにある子どもが多く、それを利用して調べ物をする。また、さらに知りたいことがあると、そのままにしないで、図書館やインターネットを使って調べる行動が取れる傾向にあるということができるだろう。

### 結 論

今回の調査からは、アカデミックコンピテンス（学力の自己評価）が比較的年少の頃から客観的であること、そして各学習観と各学習力が、アカデミックコンピテンスと関係があることが示された。すなわち、自己学習力が、一般的な学力と関係があることが示唆されたといえる。今後は、この関係を詳細に検討していく必要があると思う。